

2014. 12

〈特別寄稿〉

『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』補論 清水 有子 ... 1

〈論文〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... ニダ・T. クエバス ... 11

Naufragio, colonización y comercio:
relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII
..... 方 真 真 ... 33

メノアメリカ考古学における日本人研究者
..... 市 川 彰 ... 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico
Tlalancaleca, Puebla 2012-2014
..... 嘉幡茂／村上達也／フリエタ・M.= ロペス・J.／
..... ホセ・ファン＝チャベス・V. ... 73

メキシコ・ゲレロ州海岸山岳地域の共同体警察による代替的司法の挑戦(前編)
..... 小 林 致 広 ... 107

Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol dos séculos XVI e XVII.
..... マリア・デ・デウス・ペイテス・マンソ／ルシオ・デ・ソウザ ... 121

16世紀ニカラグアにおける造船拠点の成立条件に関する考察
..... 立 岩 礼 子 ... 133

〈研究ノート〉

氾濫するドラッグの中で人生の偶発性と向き合えるか
—経済発展を続けてきたブラジルでドラッグの合法化を考える
..... 高 橋 慶 介 ... 151

〈調査研究報告〉

ニカラグア学術調査報告「2014夏期調査」—アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ—
..... 辻 豊 治／南 博 史 ... 161

No.

14

〈ARTÍCULO INVITADO〉

A supplement of *Kinsei nihon to Luzon*..... Yuko Shimizu ... 1

〈ARTÍCULOS〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... Nida T. Cuevas... 11

Naufragio, colonización y comercio:
relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII Chenchen Fang ... 33

Japanese Scholars in Mesoamerican Archaeology Akira Ichikawa ... 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico
Tlalancateca, Puebla 2012-2014
Shigeru Kabata/Tatsuya Murakami/
..... Julieta M. López J./José Juan Chávez V. ... 73

Los desafíos de la justicia alternativa por la CRAC-PC de La Costa-Montaña de Guerrero,
México (Primera parte) Munehiro Kobayashi ... 107

Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol
dos séculos XVI e XVII. Maria de Deus Beites Manso/Lúcio de Sousa ... 121

El Realejo y sus condiciones como el puerto próspero durante el siglo XVI
..... Reiko Tateiwa ... 133

〈NOTA Y COMENTARIOS〉

Facing the contingency of life in the overflow of drugs:
Rethinking the legalization of drugs and economic growth in Brazil
..... Keisuke Takahashi ... 151

〈NOTAS DE INVESTIGACIÓN〉

Informe sobre la investigación académica de Nicaragua [Investigación de verano, 2014]
—para estudios del área cultural del Mar Mediterráneo Americano—
..... Toyoharu Tsuji/Hiroshi Minami ... 161

〈特別寄稿〉

『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考』補論

清水 有子

キーワード

鎖国, スペイン, ルソン, 国家, 対外関係史, キリシタン

Abstract

My book *Kinsei nihon to Luzon* (Early Modern Japan and Luzon) published in 2012 discusses about the impact of the Japan-Spain relation on the course of Japanese history during 16th and 17th centuries. It focuses not on Spain itself but on Luzon, its colony, as a direct contact with Japan. Traditionally the historiography about the isolation of Japan has analyzed mainly from the point of view of the governmental institutions of Japan and Spain. Furthermore, the private initiative has been downgraded, which gives us misleading information that differs from reality. My approach based on the Japan-Luzon relation prevails that it was the Japanese who promoted such bilateral relation for commercial reasons in order to import products, and for religious reasons in order to bring missionaries; not for the Spanish as it was traditionally believed.

1. はじめに

本稿は、2012年に刊行した拙著『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考』（東京堂出版）で明らかにしたことがら、鎖国研究史上においていかなる意味があったかという点を、筆者なりに再整理した補論である。ちなみに上記拙著は、16～17世紀にかけての日本とスペイン領フィリピン諸島ルソン（呂宋）との関係を取り上げ、日本の「鎖国」の形成に多大な影響を与えたという点の論証を目的としたものであった。

刊行してから現時点で2年の歳月が過ぎたが、この間に幸いにも深谷克己氏、清水光明氏に拙著に対する書評を〔深谷2013〕〔清水2013〕、小川早百合氏に新刊紹介文を執筆していただく機会に恵まれた〔小川2013〕。いずれも筆者以上に的確な表現で内容を整理し直されたうえ、各自の専門の見地にひきつけた評価点や疑問点を提示されている。多忙を極める中で、微妙に専門分野の異なる拙著に対し執筆の労を取り、貴重なご意見を与えて下さった深谷氏、清水氏、小川氏に、改めて感謝を申し上げたい。

そのうえでなお気にかかる点は、鎖国研究や対外関係史研究に従事する研究者が拙著を専門の見地でいかに位置づけているのかということである。しかしそれを知るののできない現状にお

いては、自分自身で考えるところを誌上に残しておくことも、全く無駄ではないように思われた。刊行から2年の歳月がたち、以前より客観的に自分の研究を捉え直すことができる状況にあり、また私見を補足する好機でもあるので、刊行当時には明確に文章として表現することができなかったいくつかの論点とあわせて、ここに短文を提示することにしたい。

初めに、拙書がなぜスペイン本国ではなくルソンとの関係を取り上げたのか、またそのことは鎖国研究史上いかなる意義があると考えられるのかを述べ、続いて日本-ルソン交流史を再整理し、最後に拙著の意義について、総括を試みたい。なお客観性を期するため、次章以下の本文では研究者名については敬称略としたことをお断りしておきたい。

2. なぜルソンなのか—鎖国研究におけるスペイン理解の問題点—

日本の歴史上、スペインとの関係が最も濃密であったのは、フランシスコ・ザビエルが来日した1549年から、1640年代に鎖国が成立するまでの数十年間であったといえる。この間の日本-スペイン交流史に関する先行研究で、おそらく最も多く取り上げられているテーマは、慶長遣欧使節であろう¹⁾。

周知のように使節の一行はアメリカ大陸経由でスペイン国王とローマ教皇に謁見し、帰路にはフィリピンのルソン島に立ち寄り、7年後の元和6(1620)年に無事長崎に帰着した。このような地球を横断するスケールの大きさが、慶長遣欧使節研究に取り組む人びとを惹きつけてやまない魅力のひとつであるといえようが、関連研究の多さに関しては、これまでの鎖国研究の潮流もまた、影響しているように思われる。

鎖国研究史を大まかに整理すると、次のようになる。岩生成一は、1963年に論考「鎖国」を発表し、ヨーロッパ史料を駆使した実証研究にもとづき、鎖国とは「キリスト教を徹底的に禁圧するために採用した強力な政策であって、海外交通貿易は極端な制限と取り締りを受け、その結果おのずからわが国が国際的孤立状態に陥ったことを指している」(〔岩生1963〕59頁)と定義した。岩生は、16～17世紀の東アジア貿易について、オランダ東インド会社が覇権を確立していった過程とみなし、江戸幕府はオランダ側のそうした進出動向に結果としては対応するかたちで、国際的観点から極めて閉鎖的な国家体制を創り上げたと論じたのである。しかし、ヨーロッパ側史料を中心に引き出されたこうした評価は、ヨーロッパ人の目から見て「閉鎖的」と言い得るものであり、「国際的」という表現が用いられつつも、岩生の論述展開において東アジアの人々の存在は、希薄と言わざるを得なかった。

この点は、数年後に朝尾直弘が批判するところとなる。周知のように朝尾は、「ヨーロッパ-日本」の単一・直線的な関係ではなく、日本が位置し歴史的に大きな影響力を受けてきた東アジア世界を媒介として、鎖国制の形成もまた検討しなければならないと指摘した〔朝尾1970〕。

朝尾の問題提起は、中国、韓国の経済発展をうけ東アジア諸国・周辺諸地域との関係構築が課題となりつつあった同時代の日本社会の関心に応えるものであり、多くの研究者の心を捉えた。鎖国研究は転換期を迎え、以降は日本と中国、朝鮮、琉球、アイヌとの関係史をテーマにした研究が、質量ともに充実していくこととなる。

こうした新たな研究潮流の集大成的な成果として、荒野泰典は1988年刊行の『近世日本と東アジア』で岩生説を正面から否定し、近世日本の国家体制として「鎖国」に代わる「海禁」・「華夷秩序」

を対抗理論として提示するにいたり、理論上東アジアにおけるヨーロッパ諸国の影響力は認められないとした〔荒野 1988〕²⁾。

さて上記の研究状況において、研究者のスペイン理解は長らく、1970年代頃までの段階にとどまることとなった。すなわち岩生成一が実証した、江戸幕府は鎖国を形成する早い段階で1624年にスペインと断交したが、その理由は、スペイン領フィリピン・ルソン島から決死の覚悟で多くの宣教師が日本に渡航したことが幕府の禁教政策に抵触したためであり、東アジア貿易の覇権を狙うオランダ人の告訴—スペインは宣教で諸外国を征服侵略した国家である—も大きく影響したためであるとの理解が、長い間定説の位置を占めることとなったのである。

この過程で形成された日本史研究者のスペイン理解は、次の3点の特徴を持っていると考えられる。

第1に、岩生説に反映されている国家の枠組み、国家間の外交関係を中心とする史観の影響を受けている。明治期に近代国家としての歩みを始めた日本政府は、それに資する海外交流の遺物に関心を持ち、明治初年の慶長遣欧使節関係の遺品調査に着手し、明治42(1909)年には東京帝国大学史料編纂掛が慶長遣欧使節関係史料(『大日本史料第12編之12』)を刊行したが〔濱田 2010〕、そのような時代背景、史料環境の影響下にあった岩生ら研究者の関心もまた自ずと、スペイン本国と直接交渉を行う使節の実態解明に向けられることになった。

慶長遣欧使節に先行した天正遣欧使節についても、昭和17(1942)年刊行の幸田成友の著書『日欧交通史』に、「明治6年岩倉大使の一行が伊太利のベニスで、300年前の使節一行から同市に宛てた日本文の文書を見られ、爾来東西の学者の新しい研究が行はれ、近年は何人と雖も事実の大意を心得て居るやうになりました」〔幸田 1942〕97頁とあり、やはり明治期に盛んに研究が行われた様子がうかがえる。幸田自身が著書の中で、両使節に関してそれぞれ一章を割いているように、遣欧使節は日欧交渉史上の重要トピックであり、明治期以降も、研究書の中で大きな位置を占め続けた。そこに見られる国家中心の視点、史観は、岩生の活躍した時代には批判の対象ではなく、スペイン交流に関してもごく自然に、国家の枠組みでとらえられ、現代にいたるまで継承されている。

第2は、国家の枠組みを継承するために、宣教征服論、すなわちスペイン国家には日本を植民地化する目的があり、日本への宣教は征服手段の一環であったという説が広範に受け容れられている。同説に関しては現に南米での植民の事例があり、江戸時代の日本の人びとがそれを認識していたということも説得力を与えているが、イエズス会士の日本軍事征服計画の存在を実証した高瀬弘一郎の研究〔高瀬 1977〕が決定的な影響力を与えているといえよう。例えば近年も高瀬説を援用して、豊臣政権による朝鮮侵略の原因となったこと等が主張されている〔平川 2010〕〔深谷 2012〕。

第3として、スペインとポルトガルとの国家的競合・対抗関係が強調されている。日本イエズス会は巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの方針により、日本宣教を独占する教皇勅書を獲得し、そうした状況を打破しようとする後発のスペイン系托鉢修道会との間で激しい論争を展開したが、このことが日本の統治者に悪印象を与え、鎖国政策にも影響を及ぼしたと〔加藤 1981〕は指摘している。加藤説は、ポルトガルの国家事業の一環としての宣教の位置付けを明らかにした〔高瀬 1977〕に依拠しており、そうした意味においても岩生に続く高瀬の実証的研究は、現在まで強い説得力を与えているといえようが、両者の共通点としてはほかに、国家間外交への高

い関心があげられるのである。

このようにスペインは国家としてとらえられ、スペイン外交も国家間外交として論じられてきた。しかしながら、日本の対外交は国家による外交のほかにも、[田中 1975] の先駆的研究に見られるように、中世以来東アジア海域上で展開した、民衆を含めた多様で私的な交流を指摘し得るのであり、16～17世紀のスペイン・日本交流史に関しても、以下にあげる理由により、後者の視点は不可欠である。

第1に、スペインのアジア外交は本国ではなく、フィリピンに存在した植民地政府のルソン総督府が直接の窓口となっていた。ルソン-スペイン間の通信は、年一度の航海便が基本であり、往復に5年を要した便もあった。こうした通信状況のもとでルソン総督は必然的に戦争、外交の大権を本国国王から委任されていたのであり、総督のスペイン国王宛年度報告書も、基本的には国王の事後承諾を求める形式となっている。このようにルソン総督府は対日政策の実質的な決定権を有しており、従来のように、遣欧使節にスポットをあててスペイン国王の対日政策を分析するだけでは、交渉の全体像を見失う問題が生じる。

上記した第2の宣教征服論に関しても、そうした現場の交流の見落としの中で、日本史研究者の間で定着した学説であり、問題がある。確かにルソン総督自身が日本征服論に言及した事例は存在するのであるが、総督府の対日政策の基本線として維持されたのかという点については、これまで不明であった。したがって検討すべきは、アジアにおけるスペイン外交の窓口を担ったルソン総督の対日方針の全容であり、一部の宣教師や一時の総督の方針ではないはずである³⁾。

上記第3の、イベリア両国間の対抗関係に関して言えば、ポルトガルとスペインは1529年のサラゴサ条約でモルッカ諸島の問題に一応の決着をつけた後、決定的な対立抗争を引き起こしていない。東アジアにおける両国の関係は、先に到達したほうが領有権、貿易権を占有するというルールのもとで、小競り合いはあっても基本的には戦争にまではいたらない「共生関係」であったと筆者は考えている(拙著第1章)。例えばポルトガルはゴア、マラッカ、マカオ、長崎に、スペインはルソン、セブ、台湾のキールンに拠点をおき、あるいは実効支配したが、相互に権益を侵犯することのない「棲み分け」の関係を貫いている。1545年、モルッカ諸島でスペインのヴィリャロボス艦隊が現地イスラーム政権との協力関係よりも、ポルトガル勢力に投降することを選択し、後者との徹底抗戦を回避したのも、そのためであろう。このように現場の状況を検討すると、学説との「ずれ」が看取される。

つまり、従来の伝統的な国家中心の見方は部分的であるうえに上述した問題点があり、日本・スペイン関係を捉えきれていないと考えられる。とすれば、イベリア勢力への対抗的措置として形成の過程が説明されている日本の「鎖国」に関しても、再考の必要があるのではないか。そうした疑問のうちに筆者が考えたことは、従来の国家の枠組みを中心とする研究視角から一度離れて、日本とスペイン勢力が日常で交差した現場の視点から両者の関係を今一度捉え直す必要がある、ということであった。その現場が、ルソンなのである。

3. 日本-ルソン交流の特徴

それでは、実際の交流の現場ではいかなる様相が見られ、展開したのか。本章ではこの点を拙著の第4章と5章および近年の議論を踏まえて、再整理しておこう。

まずルソン総督サンティアゴ・デ・ヴェラの書状ほかを見ると、スペイン人の間にはデマルカシオンの理念を尊重し、ポルトガル勢力圏内の日本へは渡航しない方針があったことがわかる。その一方では、スペインの派遣艦隊がルソン島を征服する 1571 年以前から、日本の民間商船がルソンに渡航していた。1580 年代に渡航船はさらに増加するが、これはルソンに集積する国際商品を購入するためであったと考えられる。

近年、中島楽章は「1570 年システム」として、1570 年前後、東～東南アジアの海域で貿易秩序の変化があり、交易活動は国際化し、一段と活発化したと指摘している [中島 2013]。中国明朝が求心力を低下させ、興隆する私貿易活動に対して従来の厳格な海禁政策を維持しえなくなり、より柔軟な外交貿易体制へと切り替えたことが背景にある。そうした再秩序化の過程で、ポルトガル、スペイン勢力が貿易圏に参入し、ルソン—メキシコ間のガレオン貿易を通して、地球規模の経済活動が展開する。ペルー産などのアメリカ銀の 1、2 割はルソンを経由し、その大半は中国大陸が吸収した [岸本 1998] ことに示されているように、海禁政策の緩和以降、中国商人が大挙して渡航したのは、銀が集積するルソンであった。

銀を求める中国商人がルソンへもたらした商品はモルガの著書『フィリピン諸島誌』に見られるように多種にわたるが、生糸、絹布類が中心であった [Morga 1909]。これらは日本で需要の高い商品であり、日本人商人や海賊がルソンに向かう主要な動機となった。彼ら日本人は、中国向け輸出品として銀の板を持参したようである。スペイン人向け商品としては、主に食糧（小麦や豚肉など）や武器を製造するための鉛、鉄があり、帰り荷には、上記の中国商品のほか、スペイン産の葡萄酒や、ルソン産の鹿革（武器、武具などの軍需用品や草足袋などの製品用）などがあった [Morga 1909] [岡田 1983] [ヒル 2000]⁴⁾。このような商品リストを一覧しても、ルソンはフィリピン原産品のほか中国、メキシコ、スペイン産商品が集積する、国際交易港として機能したことがわかる。

日本から東南アジアのなかで最も近距離にあるという条件も手伝い、ルソンへ渡航する日本商船は 1580 年代に入って増加した。領主権力を背景とする公貿易船の往来は、九州地方の大名、松浦鎮信と大村純忠の使節派遣を端緒としており、1584 年以降にそれぞれ貿易船に使者を乗せてルソン総督との通信を求めた。両氏ともに在ルソンのフランシスコ会士の派遣を依頼したが、これは当該時期のイエズス会準管区長ガスパル・コエリュと、松浦氏と接触した同会士らの要望に応じたものであろう。宣教師を領内に招くことで、ルソンとの恒常的な貿易関係を構築しようとしたと考えられる。こうした九州の領主層からの働きかけは、後年の島津氏にも見ることができる [拙論 2012]。

豊臣秀吉政権は、1592 年の朝鮮侵攻開始と同時に、キリシタン商人の原田孫七郎（洗礼名ガスパル）をルソンに派遣し、総督に服属を要求している。周知のように東アジア貿易は中国皇帝が中華（華夷）思想に基づき周辺諸国の王を国王に任命し、冊封する政治体制と結合しており、君臣関係の設定を前提としていた [西嶋 1985]。秀吉の尊大な書状からは、武威を背景に自己を中心とする華夷意識のもとに貿易関係をルソン総督と取り結ぼうとしたことがうかがえる。一方ルソン総督は返礼使節としてドミニコ会士のファン・コボを派遣し、服属要求への返答は避け、友好親善を取り結ぶ意志を表明した。しかしコボがルソンに帰還する途中で死亡すると、以降は貿易商人の原田喜右衛門が、秀吉の再度の服属要求を揉み消す情報操作を行って友好関係を継続させている。

この間の1593年、秀吉は高額で取引されるルソン壺の独占輸入を目的として、ルソンへ渡航する日本商船に許可証 *licencia* を携行させる制度を創設した。このときフランシスコ会士（ペドロ・バプティスタ）が発給する紹介状を渡航許可証として認めたが、これは日本人海賊が横行したために、キリシタン商人をルソンで優遇したことが背景にあったと考えられる。秀吉は伴天連追放令を1587年に発令し、ポルトガル貿易継続のためイエズス会士の日本残留を黙認せざるを得なかったが、ルソン貿易に関してもやむなく宣教師を重用したことがわかる。

続く徳川家康の統治期間には、朱印船貿易制度が布かれて、ルソン貿易は引き続き政権の管理下に置かれている。禁教政策についてもほぼ秀吉政権の基調を継承しており、対外的には禁教を表明している。その一方で国内にいる宣教師を優遇したため、日本のキリスト教界は最盛期を迎え [五野井1992]、1612年代の信徒数は60万人に達していたと言われる [Schütte1968]。宣教師の優遇は言うまでもなく、南蛮貿易の継続のためである。例えば家康はメキシコ貿易を計画し、慶長17（1612）年に伊達正宗が派遣する慶長遣欧使節を許可したが、そうした貿易拡張の志向と商教未分離の状況が、日本のキリスト教勢の興隆につながったといえよう。

以上の日本-ルソン交流初期の特徴をまとめると、①スペイン人側ではなく、国際商品や宣教師を求める日本人の積極的な働きかけで成立した、②活発な民間交流があり、次いで公貿易が展開した、③そのことが日本国内のキリスト教伸展を後押しした、の3点となる。

このように日本-スペイン間交流の「現場」に着目しその展開をおさえると、これまでのような、スペイン国家が日本の軍事征服を意図したために積極的に日本に進出したという解釈や、日本への密入国を試みた宣教師側の一途な信仰熱を鎖国政策の原因としてクローズアップする説は、実態に照らして違和感を覚えざるを得ない。実態としては、キリシタン信仰を主体的に受容した民間の日本人側の動向が重要である。拙著で述べた通り、彼ら日本人キリシタンはこののちルソンの宣教拠点化を支えるなど、江戸幕府が鎖国政策で対応せざるを得ないほどの、極めて重要な意味を持ってくるからである。

4. おわりに

最後に拙著の対外関係史上の意義を、以下2点にまとめておこう。

第1に、国家の枠組みへの視点を解除したことで見えてくる、日本-スペイン交流の実態に注視し、交流の歴史的過程を明らかにしたことにある。従来は、外交使節が持参した国書の文面から宣教や貿易をめぐる国王や将軍の政策意図を明らかにすることなどに研究者の関心が向けられていたと言えるが、そうした視角のみでは、なぜ両者の関係が始まり変化し終ったのかという歴史的理解に到達することは、困難であった。

第2に、第1の成果を踏まえて、鎖国の形成過程における対抗軸は「日本-スペイン」ではなく、「江戸幕府-日本のキリシタン民衆」であったと指摘した。ルソン総督府の報告書を検討し、江戸幕府の禁教令に抵抗してルソンを往来した日本のキリシタン民衆がいたこと、彼らを含む交流の状況に対応した国家の政策の積み重ねが、日本の場合は「鎖国」という国家体制を創出したのではないかと述べた。換言すれば、江戸幕府がキリスト教を禁止して鎖国政策を打ち出したのは、スペイン国家の日本征服志向などに対抗したからではなく、自国の民衆がキリスト教を受容し、禁教令に敢然と抵抗したことへの対応であった。

以上を踏まえてさらに述べるならば、キリスト教は16世紀の地球的世界の形成〔増田1984〕〔山口1993〕によってはじめて日本にもたらされ、人びとに、それまでに経験したことのない視圏や思想の広がりを経験させるものであったが、そうした外部からの影響を遮断して、江戸幕府が自らの求心力を維持しようとした結果、作り上げられたのが鎖国という国家体制であったと筆者は考えている〔清水2014②〕。幕府の懸案材料は、海外というよりも、国内に存在したのである。

[付記] 本稿は、2014年2月26日、京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所の主催による第13回ラテンアメリカ研究講座国際シンポジウム「大洋が結ぶ世界（16～17世紀）～ラテンアメリカから東アジアへ～」における基調講演の一部を文章化したものである。

注

- 1) 昨年2013年は使節支倉常長ら一行を乗せた船が慶長18（1613）年に仙台を出航してから400年目にあたり、各地で様々な記念シンポジウムが開催された。本稿もその恩恵の一部を受けている。
- 2) 荒野の論点を筆者なりにまとめれば、次のようになる。岩生の「鎖国＝国際的孤立」とする理解は、実態と乖離している点に問題がある。幕府は外交窓口として「四つの口」を開き、中国、朝鮮、オランダ、アイヌ、琉球との関係を維持したからである。国民の海外渡航を禁止した点は、中国や朝鮮が公的な貿易の秩序を維持するために、人民の勝手な海外渡航を禁止した「海禁」政策と同じであり、外交関係について、自己に都合のよい華夷的な編成（華夷秩序）をした点も共通している。したがって「鎖国」とは、東アジア諸国の慣習的、伝統的な政策理念を継承した、国家による外交の独占・管理政策といえる。
 荒野は以上の結論と「鎖国」の言説自体が抱える負の遺産を考慮すると、歴史用語としての使用をやめ、「海禁」に統一すべきだと主張したため、大きな反響を呼ぶこととなった。16～19世紀の日本の国家体制は、「鎖国」かそれとも「海禁」と呼ぶべきかで議論となり、現在では「海禁」を使用しないまでも、「鎖国」のようにカギ括弧を付すことが研究書ではいわば常態となっている。つまり、荒野説の登場によって研究者の視圏は広がり、岩生説は相対化されたといえるが、しかし見方を変えれば、1970年のターニング・ポイントから対抗理論が出た現今もなお岩生説は生き続け、継承されているのである。それはやはり、岩生が実証した「鎖国」の形成過程に説得力があり、たとえ同時代の使用例がなく、言説に負の過去があったとしても、極限まで対外関係を縮小制限した実態を表現した「鎖国」に、歴史用語としての適性を感じ取る研究者が多いからではないのだろうか。
- 3) 筆者は最近、イエズス会の軍事征服計画説に対して、同会は日本宣教方針として宣教征服論とは原理的に矛盾する適応主義を採用しており、一部の宣教師の計画が全体としてどれほどの威圧感を東アジアや日本の統治者に与えたのか疑問があると述べた〔清水2014①〕。
- 4) 〔岡田1983〕によれば、17世紀初頭のルソン島では、日本人向け商品の鹿革とスペイン人の鹿肉需要のため、年間6～8万頭の鹿を狩猟したという。

参考文献

荒野泰典

1988 『近世日本と東アジア』, 東京大学出版会。

岩生成一

1963 「鎖国」, 『岩波講座日本歴史 10 近世 2』, 岩波書店, pp. 57 - 100.

朝尾直弘

1970 「鎖国制の成立」, 『講座日本史』 4, 東京大学出版会, pp. 59 - 94.

岡田章雄

1983 『岡田章雄著作集Ⅲ 日欧交渉と南蛮貿易』, 思文閣出版。

小川早百合

2013 「<新刊紹介>清水有子『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』, 『キリスト教史学』, 67, pp. 203 - 205.

加藤榮一

1981 「統一権力形成期における国際的環境」, 同・山田忠雄編『講座日本近世史 2 鎖国』, pp. 1 - 43.

岸本美緒

1998 『東アジアの「近世」』, 山川出版社。

幸田成友

1942 『日欧通交史』, 岩波書店。

五野井隆史

1992 『徳川初期キリシタン史研究 補訂版』, 吉川弘文館。

清水光明

2013 「<書評>清水有子『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』, 『メトロポリタン史学』, 9, pp. 165 - 175.

清水有子

2012 『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考』, 東京堂出版。

2012 「島津義弘の東南アジア貿易」, 『日本歴史』 775, pp. 94 - 102.

2014 ① 「イベリア・インパクト論再考—イエズス会の軍事的性格をめぐる—」, 『歴史評論』, 773, pp. 78 - 97.

2014 ② 「近世日本のキリシタン禁制—地球的世界と国家・民衆—」, 『歴史学研究増刊号』, 924, pp. 65 - 76.

高瀬弘一郎

1977 『キリシタン時代の研究』, 岩波書店。

中島楽章

2013 「序論—「交易と紛争の時代」の東アジア海域—」, 同編『南蛮・紅毛・唐人—一六・一七世紀の東アジア海域』, 思文閣出版, pp. 3-33.

西嶋定生

1985 『日本歴史の国際環境』, 東京大学出版会。

濱田直嗣

2010 「国宝『慶長遣欧使節関係資料』伝来の経緯」, 『仙台市史 特別編8 慶長遣欧使節』, 仙台市, pp. 497-506.

平川新

2010 「前近代の外交と国家—国家の役割を考える」, 近世史サマーフォーラム 2009 実行委員会『近世史サマーフォーラム 2009 の記録 帝国の技法—個から迫る歴史世界—』, pp. 1-29.

ヒル, フアン

2000 『イダルゴとサムライ—16・17世紀のイスパニアと日本』, 平山篤子訳, 法政大学出版局。

深谷克己

2012 『東アジア法文明圏の中の日本史』, 岩波書店。

2013 「〈書評〉清水有子『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』」, 『歴史学研究』, 905, pp. 37-41.

増田義郎

1984 『大航海時代』, 講談社。

山口啓二

1993 『鎖国と開国』, 岩波書店。

De Morga, Antonio

1909 *Sucesos de las islas Filipinas*, nueva edición por W. E. Retana, Madrid.

J. Fr. Schütte

1968 *Introductio ad Historiam Societatis Jesu in Japonia 1549-1650*, Institutum Historicum Soc. Jesu, Roma.

